
齊藤 陽子 (さいとう ようこ)



【書名】赤毛のアン
【著者】モンゴメリ (村岡花子 訳)
【発行】新潮文庫

言わずと知れた児童少女文学の名作「赤毛のアン」は、実はシリーズものであり、全9巻から成りますが、そのうち第1巻である本作がよく知られています。しかし読んだことがある人は意外と少ないのではないのでしょうか。実はこの本の熱狂的なファンは世界中に数多く、その一人である脳科学者の茂木健一郎先生は高校時代に英文原著を全巻読破され、さらにアン好きが高じて書籍も出版されているほどです（「赤毛のアン」で英語づけ、茂木健一郎著、夜間飛行出版社）。私は尊敬する中学校の担任の先生から勧められてアンと出会いましたが、今は自分の娘にアンという名前を付けているほど、アンが大好きです。アンは天性の想像力に恵まれ、例えるならダイヤモンドの原石のような少女ですが、一方で容姿（赤毛とそばかす）に強いコンプレックスを抱え、欠点のある不完全な少女として描かれます。幼い頃に両親を亡くし、孤児院で育ったアンには強い自我があり、特に自分の容姿をバカにする人間に対しては啖呵を切り、ときには石板で殴りつけたりもします。そんなアンが教育的な養父母マッシュウとマリラの深い愛情によって導かれ、他者との良好な関係を築き上げて素敵女性に成長していく姿は実に感動的です。

【書名】悩む力
【著者】姜尚中
【発行】集英社新書

メディアでおなじみの政治学者、姜尚中先生のベストセラー著書です。この赤本内でも多くの先生方が推薦されている文豪夏目漱石、そして二十世紀最大の社会学者と言われるドイツのマックス・ウェーバー・・・奇しくも同時代を生きた2人の思想の共通項が、現代を生きる私たちの生きる手がかりとなるのでは・・・という大胆な発想で書かれた本です。私たちが生きていく上でぶつかる壁、悩みというのは、実は社会構造に起因する側面があり、この時代を生きることは前提として困難を伴うこと、したがって悩みが生じることには必然性があること・・・知的で理性的な語りかけには強い説得力

があり、おそらく読み手の気持ちを楽しませてくれるのではないかと思います。

【書名】 君たちはどう生きるか

【著者】 吉野源三郎

【発行】 岩波文庫

この本は、兄の中学受験期に国語の読書課題として指定されていたもので、実家の書斎に置かれていたことをよく記憶しています。その当時は（固いタイトルということもあり）手に取るだけで中を覗くほどの興味が持てなかったのですが、実は身近な題材（中学生の日常生活）から深いテーマを導くような構成になっており、人が生きていく上でぶつかる普遍的な悩みや大切にすべきことについて、確かに小学生でも読むことができるような作りになっています。2017年、漫画版が出版されて話題になりました（君たちはどう生きるか、吉野源三郎 [原作]、羽賀翔一 [漫画]、マガジンハウス）。あとがきにも書かれていますが、この本が執筆されたのは軍国主義が日本を色濃く覆っていた1930年代です。当時この内容を発表することも勇気がいるように思いましたが、著者の想いがこのように時代を超えて受け継がれている価値について改めて考えさせられます。もう少し若い時に読んでおけばよかったです。

【書名】 わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か

【著者】 平田オリザ

【発行】 講談社現代新書

誰しも幼少期からお友達と仲良く、と言われて育ちます。でもそのお友達が自分にとっての他者である以上、そう簡単にはいきません。私も他者との関係でうまく折り合えない・・・と悩んでいた時にこの本を手に取りました。分かり合えなくて当然だ、と開き直るところから他者との関係がスタートする、「伝わらない」経験が「伝えよう」とする意欲や能力を向上させる、という主張に、雷に打たれたような気持ちになりました。著者の平田オリザさんは劇作家であり、現代口語演劇理論を確立させた第一人者です。単一民族国家である日本は、民族紛争などとは無縁であり、むしろムラ意識に代表される同調圧力などが存在するくらいです。言語によるコミュニケーションの発生はこのような国家のありように根差すところが大きく、紛争の多い諸外国とは異なり、我が国ではコミュニケーションの基本となる「対話」の必要性が相対的に低かったことが本の中で指摘されています。すなわち我々日本人

は日ごろから対話のトレーニングが十分になされているとは言い難く、だからこそ、「理解しよう」「伝えよう」と努力する必要があることに気づかせてくれます。